

この四月、大学を出て間もない若者を、新しいスタッフとして迎え入れた。関西の美術系大学で学んだあと、故郷の九州に帰って、結婚式の映像づくりなどを一年間したのちの入所なので、まったくの新人ではないが、あまりに知らないことが多くておどろくふと思い直し、彼を若者の代表と見なし、彼ら・彼女らがなにを知らないのかを記録しておこうと考え、彼の名を冠した「〇〇ノート」をつくりはじめた。

「ペ平連」や「フォークゲリラ」を知らないのはもちろんだ。定規やカッターナイフの使い方もあやしい。紙を截断する際は「自分に対して水平に刃を動かす」が原則なのだが、垂直方向に切り落として、はらはらさせる。紙の種類や目的に応じて、糊の接着力を使いわけるときだが、これもあぶない。紙とのコミュニケーション能力が低下している。

「判型」「小口」「平アミ」などの、装丁や印刷関連用語は知らなくても当然か。じょじょに覚えていけばよい。だが、つぎのような例はどうだろう。森陽外という人名の「陽」の字には、偏を「区」と記す新字と、なかに「口」をみつ書く旧字とがある。専門家のあいだでも論争があり、かならずしも旧字が正しいとは言いきれない。陽外自身が字画を省略した新字体で署名した文書が残っている。

漢字に関する知識は、装丁や印刷関連用語

連載エッセイ 第42回

仕事と出会う

よりも高度に思え、専門用語よりもさらに遅れて覚えればよいと思われがちだが、はたしてそうか。メールで送られてきた「森陽外」なる文字列を無警戒に新字で組んでしまう。結果、「旧字にせよ」との赤字を編集者から戻され、「そんなことも知らないのか」との印象を相手に与えてしまう。

同じように「三国志」の「諸葛孔明」を、なにげなく新字で出校してしまふ。「葛」の字形に数種あるのを知らないせいだ。知識は、「ここにワナが潜んでいる」と知らせてくれ

る。「諸葛孔明」の字形はどれにしますか」と相手に問い合わせるならば、編集者はその新人を見直すはずだ。こうした小さな成功の積み重ねが、若者を職業に適応させ、生涯の仕事を見えさせていく。

しかし、経験者が未経験者を一方的に見ているのでもない。彼も、わたしを見ているはずだ。ボスに言動不一致はないのか、朝に言ったことを夜に翻していないか、デザイン理論の応用に破綻はないのか、などといった観察である。

写真家志望の女性に聞いた話だ。彼女は大阪の専門学校を出て、いまはスタジオで働いている。写真家は、照明設備や機材がそろい

広い空間をもつスタジオを、時間で借りて撮影する。「撮影助手」「スタジオ助手」などとも呼ばれる彼女らは、写真家の指示にしたがって撮影の準備をし、モノを配置したりする。およそ二年のサイクルで辞めていくらしい。撮影助手の多くは、撮影技術を勉強しようとする若者だ。とうぜん知らないことは多い。反面、多くの写真家と付きあいつつ、写真家を観察する。「威張るわりには写真がたいたことがない」、「小道具が多すぎて作品に深みが欠けている」などである。

鈴木一誌

若者は、経験者から見られつつ、みずからも目上の人間を観察する。モノを知っている事態とは、逆に固定観念に捕らわれている状態とも言える。

さらに若者は、職業から見られている。あるとき、ファーストフード店でアルバイトしていた青年をスタッフに採用した。彼の電話での応対がへりくだりすぎていて、思わず叱った経験がある。口調に、ファーストフード店勤務が染みこんでしまったのだ。若い時に雑誌のデザインばかりを請け負い、その後、書籍デザインができなくなったデザイナーがいる。書籍と雑誌のデザインは、微妙だが大きくちがう。若い日の体験が、その後の人生を方向づける。若いひとには、仕事とのしあわせな出会いをしてほしい。

(すずき・ひとし／ブック・デザイナー、題字デザインも筆者)